

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部

リハビリテーション学科 作業療法学コース

助教 向山 秀

1. 教育の責任

全国の作業療法士養成校は年々増加しており、現在では大学・専門学校を含めて多くの教育機関が作業療法士の育成に携わっている。学生にとっては進学先の選択肢が広がる一方で、各教育機関にとっては、学生に選ばれるための教育力が問われる時代となっている。特に地方大学においては、限られた人口の中で安定的に学生を確保することが困難であり、学生募集と教育の質の両立という課題に直面している。本学もそのような状況下でありながら、地域に根ざした教育体制を整備し、山梨県および周辺地域の医療福祉分野に貢献できる作業療法士の育成を使命としている。加えて、地域社会に貢献できる実践力のある人材を輩出するという観点からは、単に国家試験の合格を目標とするのではなく、卒業後すぐに現場で活躍できる即戦力としての能力を備えた学生を育てることが求められている。

したがって、本学における4年間の教育課程では、評価・治療といった専門的技能の習得と並行して、主体性・協調性・柔軟な思考力といった、臨床現場で真に求められる力を、段階的かつ継続的に育成する必要がある。

私は作業療法学コースに所属し、専門科目を中心に担当している。昨年度における主な担当授業は「身体作業療法評価学演習」「身体作業療法治療学演習」「運動学実習」などであり、これらはいずれも作業療法士の臨床力を養ううえで中核となる科目である。演習形式を多く含むこれらの授業では、評価や治療に必要な技術だけでなく、思考過程や臨床判断力の基礎を重視して指導している。各授業のシラバスは、健康科学大学のホームページにて公開されており、教育内容や目的、到達目標などを明示している。

2024 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	1 年前期	必修	14 名
基礎演習Ⅱ	1 年後期	必修	14 名
作業療法概論	1 年前期	必修	28 名
身体作業療法評価学演習	2 年前期	必修	30 名
身体障害作業療法治療学演習	3 年前期	必修	17 名
作業療法演習Ⅰ-1	2 年前期	必修	30 名
作業療法演習Ⅱ-1	3 年前期	必修	17 名
作業療法演習Ⅰ-2	2 年後期	必修	30 名
作業療法演習Ⅱ-2	3 年後期	必修	17 名
作業療法学特論	4 年	必修	28 名
義肢装具学	3 年後期	必修	17 名
臨床実習Ⅰ（見学実習）	1 年	必修	28 名

臨床実習Ⅱ（地域実習）	3 年	必修	17 名
臨床実習Ⅲ（評価実習）	3 年	必修	17 名
臨床実習Ⅳ（総合実習）	4 年	必修	28 名
臨床実習Ⅴ（総合実習）	4 年	必修	28 名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 山梨県作業療法士会 養成校連携推進部
- 2) 学生・就職・卒後教育委員会
- 3) 学生募集委員会
- 4) 野球部顧問
- 5) 軽音部顧問
- 6) SNS サークル顧問
- 7) 河口湖町 通いの場 講師

1) 山梨県作業療法士会 養成校連携推進部への参加を通じて、県内の教育機関や臨床現場とのネットワークを構築し、実習や卒後教育の連携体制の強化を図っている。また、2) 学生・就職・卒後教育委員会や 3) 学生募集委員会では、入学から卒業・就職までの一貫した学生支援に取り組んでいる。さらに、4) 野球部、5) 軽音部、6) SNS サークルといった課外活動の顧問も務めており、学生との日常的な対話を通じて人間関係や生活面の支援を行っている。7) 河口湖町の「通いの場」に講師として参加することで、地域高齢者との交流を教育に還元し、地域貢献の意義や対象者理解の視点を学生に伝えるよう努めている。

2. 教育の理念・目的

本学は「豊かな人間力」「専門的な知識・技術力」「開かれた共創力」の三本柱を教育目標として掲げ、地域社会に貢献できる実践力ある専門職の育成を目指している。私自身もこの理念に基づき、作業療法学コースにおける教育活動を通じて、以下の 2 点を大切に人材育成に取り組んでいる。

1) 「作業」を追求することができる作業療法士の育成

作業療法は答えのない問いに向き合う職種でもある。悩みながらも、その人らしい生活を支える方法を一緒に探す営みにこそ、作業療法の奥深さがある。私は学生に対して、「対話と思考の深さ」を重視する姿勢を育て、目の前の評価・治療だけで完結しない広い視野を持った作業療法士を育てていきたいと考えている。

2) 作業療法の面白さと奥深さを実感できる教育の実践

作業療法の魅力は、対象者の人生そのものに関わることができる点にある。評価や治

療手技の習得も重要だが、臨床経験や地域活動で得た具体的なエピソードや事例を交えながら、学生が「この職業を選んでよかった」と思えるような授業づくりを心がける。対象者との関係性を通して得られる学びの深さを、学生自身が実感できることを重視している。

3. 教育の方法

作業療法士として必要な知識・技術の獲得に加えて、臨床現場で即戦力として活躍できる実践力を育むことを重視している。私は身体障害領域を中心とした科目を担当し、現場に即した症例や演習、最新のエビデンスに基づいた教育内容を取り入れることで、学生の臨床推論力と判断力の育成を目指している。

「身体作業療法評価学演習」では、単なる評価のみにとどまらず、臨床推論を重視した問題解決型授業を展開している。学生には評価場面における情報の選択や、仮説立案・検証のプロセスを意識させながら進め、グループワークや発表を通じて、様々な視点から考察が行える構成としている。根拠に基づく主体的な考察を促すことで、臨床に近い思考の訓練となるよう工夫している。

「身体作業療法治療学演習」では、評価結果に基づいた実践に近い介入選択ができるよう、科学的根拠に基づく教育（EBP）を重視している。演習の中では、治療立案を「何のために行うのか」「どのような対象者に適応されるのか」といった観点から説明し、各治療のエビデンスレベルや臨床的有効性も紹介している。また、教員の臨床経験から得た具体的な事例や研究知見も交えて指導し、机上の学びと実際の現場との橋渡しができるよう努めている。

このように、現場の視点と科学的根拠の双方を軸に据えた教育を通じて、学生が「なぜそうするのか」を自分の言葉で説明できる作業療法士に育つことを目標にしている。

4. 教育の成果・評価

本学では、授業の質向上を目的とした教員相互による授業参観が実施されており、私も「身体作業療法評価学演習」において同僚教員からの参観とフィードバックを受けた。その際に得られたコメントは、授業内容や展開方法、教員と学生との関係性について多角的な視点から評価されており、自身の教育実践を振り返る貴重な機会となった。

実際にいただいたコメントは以下の通りである。

- ・学生の学習速度に合わせて授業の展開を行っていた点がとても参考になった。
- ・当該授業のカリキュラム全体の中での位置づけ、他の授業との関連が冒頭で説明され、当該授業の目的がしっかり確認できた。
- ・教員自身の臨床経験から、具体的な説明がなされていた。
- ・事前に受講生と良い人間関係ができていたようであった。

これらのコメントからは、①学生の理解度や進度に応じた柔軟な授業運営、②カリキュラム全体を俯瞰した論理的な導入、③臨床経験をもとにした実践的かつ具体的な指導、④学生

との信頼関係を前提とした安心感のある学習環境といった点が、教育的に一定の効果を発揮していることが示唆される。

一方で、これらの強みを継続しつつ、今後の課題としては、技術指導の場面における個別対応のさらなる充実が挙げられる。具体的には、学生の発言に対して、フィードバックの質を高め、気づきを言語化する機会をより丁寧に設けることが求められると考えている。

5. 今後の目標

短期目標：授業設計のさらなる精緻化と、個別対応の強化

授業評価や教員間の授業参観で得られたフィードバックをもとに、演習内での学生の思考過程や技術習得のプロセスをより丁寧に可視化する取り組みを行っていく。また、学生の理解度や習熟度には個人差があることから、演習課題の難易度調整やフィードバックの質的向上に取り組み、より多様な学習スタイルに応じた指導を検討している。さらに、授業内で扱う内容についても、最新のガイドラインや研究動向を積極的に取り入れ、科学的根拠に基づいた教育（EBP 教育）の充実を図る。学生自身が根拠をもって臨床判断を行う姿勢を育てることを重視していきたい。

長期目標：地域社会と連携した教育活動のさらなる展開

通いの場や地域高齢者との関わりを通して、学生が「作業療法士として、地域で何ができるのか」を体験的に学ぶ機会を増やし、教室と地域を結ぶ実践教育を発展させていく。また、今後は実習指導体制や卒後教育のあり方についても継続的に検討し、教育の縦のつながりを意識した取り組みにも力を入れていきたい。